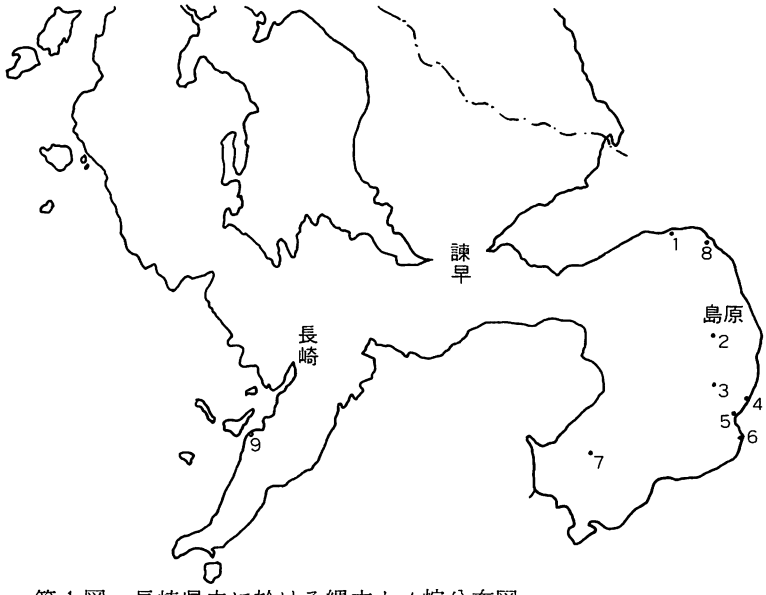
―長崎県の縄文時代のカメ棺―

古　田　正　隆

はじめに

長崎県内で、縄文時代カメ棺の発見例は、主として島原半島の筏[1]、礫石原[2]、深江舟川[3]（ふなご）同中原[4]、布津潮入崎[5]、同飯野[6]、二つ石[7]、山の寺[8]、原山[9]、向原[10]および、長崎港に面する深堀遺跡[11]で知られている。（第1図）

日本における容器葬の、カメ棺の発生は、縄文文化後期頃と考えられるが現実的には遺骨の検出が確証であり、資料的にも後期初頭以降から漸増[12]、晩期に及べばさらに類例が加わり[13]、その態様が把握でき、葬制上、カメ棺葬の概念を確立させ、体系ずけられるにいたったのである。



第1図　長崎県内に於ける縄文カメ棺分布図

1 神代筏　2 礫石原　3 山の寺梶木
4 深江舟川　5 布津飯野　6 布津潮入崎
7 北有馬原山　8 有明向塚　9 長崎深堀

それ以前の縄文文化前期や、中期においても、類似資料が皆無というわけでないが[14]、葬制上の、カメ棺として把握できるか疑わしいので、これは一応例外としたい 。

縄文後、晩期の、カメ棺を利用した埋葬形態が、資料の増加により、解明への手がかりは得られたが、問題の解決資料はいまだ充分でなく、小児遺体のカメ棺は、2000cc以上の内容積を必要とするが、成人遺体容器葬は知られず、されど成人の2次葬が知られている以上[15]、内部容積が500cc以下の小容器葬を、流産児葬や胎盤の埋土とのみみることはできない。

小児葬は、カメ棺葬に限られたわけでなく、筏遺跡では土壙葬があり[16]、葬制の様相は複雑で、これが背景社会たる採集社会、あるいは生産社会の、社会構造、生活組成による儀礼的なものか、呪術的なものか、実体の究明は、社会復元に対する研究不備の面を、大きくカバーできるもので、今後の資料をふまえて期待される、将来の研究課題であろう。

九州では広く火山灰土に被われ、遺骨の遺存に恵まれず、縄文文化のカメ棺葬は、実体は不詳ながらも弥生文化にいたれば、成人2次葬の形態が比較的明瞭となってくる。

長崎地方で縄文文化の住居と、埋葬地の関係を知る手がかりはつかめず、わずかに山の寺遺跡で敷石住居跡の東方40mにカメ棺葬のあることが知れる程度で本州、西本州各地の研究成果[17]と対比しつつ、追求されることも、今後における研究課題の一つであろう 。

これと関連して、木下忠氏の、「戸口に胎盤を埋める呪術」の研究論中に掲載[18]の、容器実測図によれば、容積が300cc 近くあり、納埋体が、必ずしも胎盤とすることは困難であり、深堀遺跡の例から[19]、3～4ケ月の胎児（流産児）葬とすることもできるであろう[20]。筏遺跡では、上記したような様々の疑問要素を内在するが、胎盤埋土が混在していたとすることは疑問が残る。

胎盤は将来に生命を得る可能性をもたず、過去においては、生命を発生保持させた残滓の廃棄物にすぎなく、葬制と結びつかない単なる呪術的な観念上の埋土で、筏のごとき、墓地として確立した地に埋土することは不合理である。

カメ棺葬を、生命の死とのみ関係ずけて考えれば、葬体は胎児、幼児、成人2次葬の3つに限定されてくる。

賀川光夫氏は、九州のカメ棺の葬制について、背景社会が、原始生産社会との関連性において、積極的に把握する多くの努力をはらわれた[21]。生命観と生産観は、元来同一思想の発源とされ、多くの問題は残こるとしても、この考えは、生産思想史から、生命の輪回観を原点に発生し派生する、カメ棺の実体の把握をめざすもので、高く評価さるべきである。

A. 長崎県の縄文カメ棺の概様

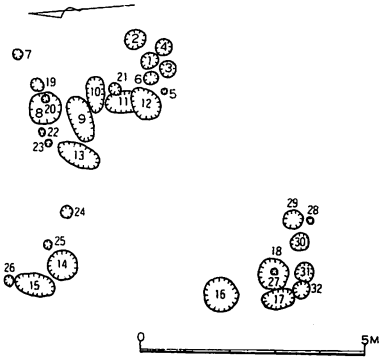
1. 筏遺跡のカメ棺

長崎県国見町神代筏遺跡は、標高8mの海岸低台地で、有明海に流入する神代川の沖積地上に立地する。

地形的には、舌状地の端部で、周辺は畑地々形であり、水田は標高6m以下に拡がる。条里遺構は5m～9m台に残こり、遺跡時代は、標高が約5m台で、島原半島特有の、部分的隆起地域上に乗るものと判断できる。

過去5次にわたる調査の結果からみて、遺跡は、ほぼ20アールの広さをもつ埋葬地で、第5次調査では、埋葬地の東側の一部に、住居跡らしいものの発見があったが、確認はできなかった。

遺物は、縄文後期磨消縄文Ⅲ式（西平式）から後期黒色磨研土器Ⅱ式（御領式期）のものにかぎられ、この文化期においては、類例をみない特異な埋葬遺跡である。埋葬の状態は、旧地形の微高約3アールの広さに集中し、カメ棺葬、土壙葬が重葬地層は攪乱しているが、(第2図)ブロック形成の、状



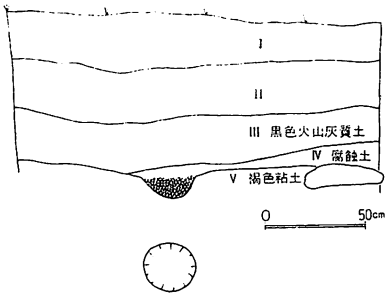
第2図　筏遺跡の埋葬状況図(部分)

態は概報で報告したとおりである。

第2図の1～4、6カメ棺は、倒置群で、カメは磨消縄文Ⅲ式（西平式）と考えられ、[22] ほかに倒置の例は発見できなかった。

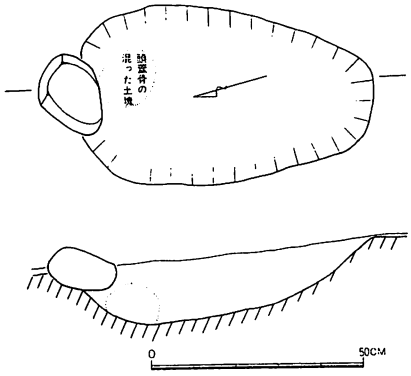
このカメの1群と、土壙8～13、19、カメ棺20～23が、1ブロックをなすものか、あるいは2群となるものか判然としないが、近接と組み合せの関係からみて、恐らく1群をなす可能性が強く、カメ棺27～32、土壙16～18は1群で、カメ棺24～26、土壙14、15は、他の1群とみられる。1群の組成は、数個のカメ棺と数個の土壙からなるようで、この関係は遺物によるもので、詳細は本報告で検討することにしたい。もしこれらのブロックが、家族的生活構成によるものとすれば、長期にわたったための重葬で、定着性のうえから、生産社会を想起しなければならない。

埋葬のブロック形成は、埋葬集団形成と、生活形体の投影である以上、住居跡の不明な段階ではこの相関々係は、埋葬上からは判断の域をでないものである。第2図19号ピットは、第3図のごとく、浅い円形のものであるが、中に成人の大腿骨1本、十字石器1個、（1部欠失）刃石器1個をいれ、岩礁棲息性貝殻を充慎したもので、骨は火に焼けた形跡はなく、この状態は、あきらかに成人の2次葬を意味する部分骨葬と、みなされるものであった。



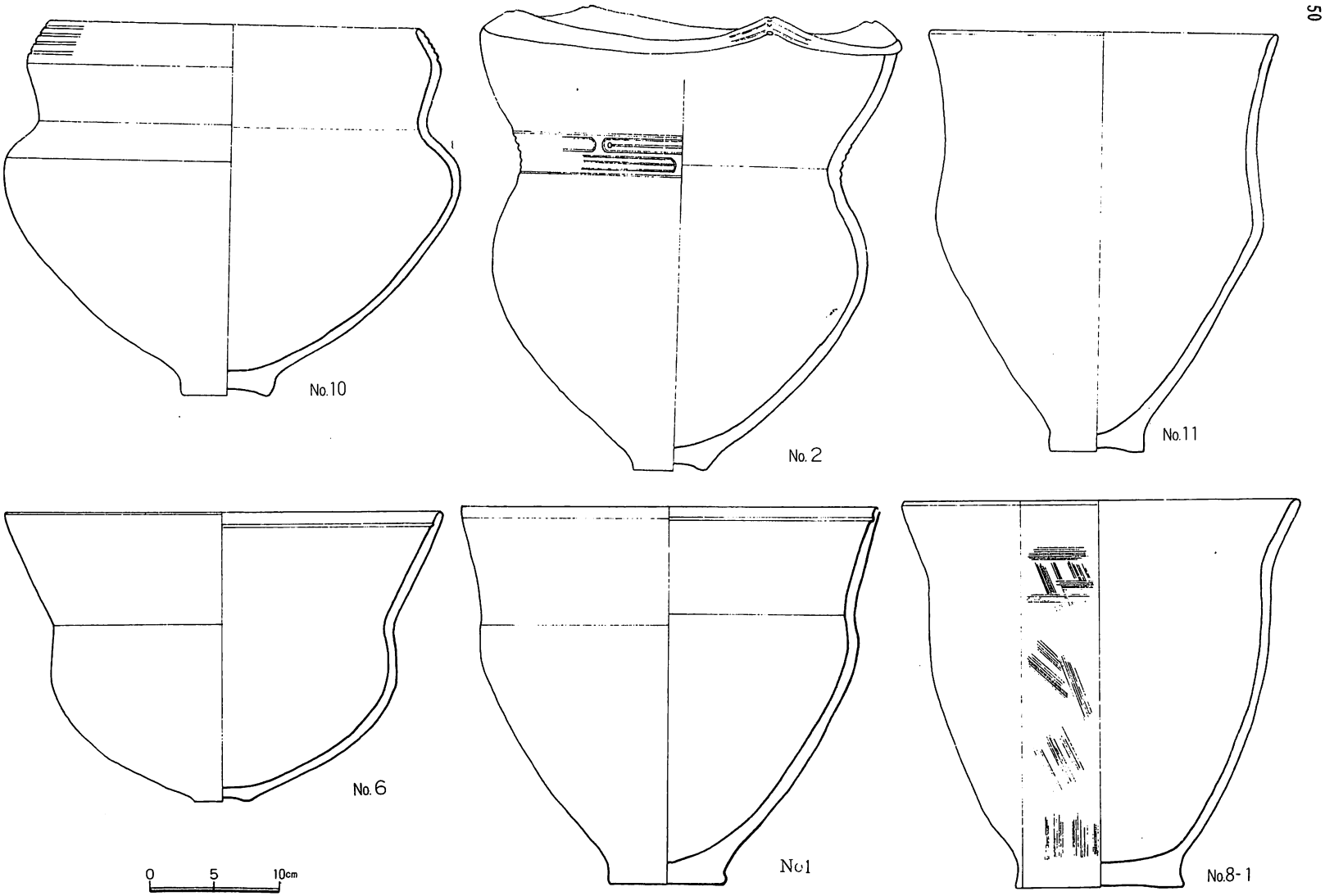
第3図　大腿骨を入れ貝殻のつまったピット

第2図の11号土壙は、第4図のごとく、長経90cm程の長楕円形で、土壙内の北側に、頭蓋骨の破片と細粉を含む土塊が玉状にのこり、その上方に枕石とみられる石があおれ、この土壙は形状から小児の葬壙であることを示していた。



第4図　石枕のある土塊（11号土塊）

第2図に示したように、土壙中8～13、15、17は、いずれも長楕円の人体形で、11号土壙からみて判断できることは、これら土壙が、小児葬とされる可能性が強く、いずれも伸展葬であったとみられることである。埋葬姿勢中、伸展形をみるのは水稲耕作の生産がはじまる、弥生文化開始以後であるとされてきたが、生産社会と葬制の、有機的相関関係からみたとき、縄文文化に、なんらかの生産が伴なったとみなされることで、さもなくば、渡来の異種文化としなければならないが、遺物の実体は、後者の判断を許さない。筏遺跡で発見された埋葬遺構は48基で、この内訳は、容器（土器）葬35基、土壙、3基で、土器葬は、カメ棺25基、小型土器（深鉢）棺10基で、カメ棺の内5基は倒置棺で、その他は、合せ口としたもの9基、単カメ棺11基で、小形容器棺は合せ口である。土壙中、形状から小児葬とみられるもの7基、カメ棺中倒置のものは口径34cm、器高38cm程の大形で、合せ口カメ棺9基と共に、小児棺であることは確実で、埋葬遺構48基中、8割以上の葬墓が小児葬の確率があり、筏遺跡の埋葬は、小児を主体としたものとすることができる。



第5図　筏出土カメ棺

倒置の5基は、垂直に、石皿の利用や平石を並べてつきかためた床上に安置していた。[23]（いずれも底部を欠失）その他のカメ棺20基は、ともに底部を欠失、合せ口、あるいは単カメで、垂直に土壙内に安置されていた。（第5図No 2、第5図No 10、同5は合せにカメ棺、同5－1、2は合せ口セット）小形容器（深鉢）の8基は全部合せ口で、下方容器は底部を欠失、カメ棺同様土壙内に、垂直に安置されていた。

11号カメ棺内では、長方形板状の、両端に若干えぐりこみのある、磨製石器（糸巻き状）が発見された。[24]

2. 深堀遺跡のカメ棺

長崎市深堀町に所在する海岸遺跡で、昭和39年以降3次にわたり、別府大学文学部考古学研究室と、長崎大学医学部解剖学第2教室が、「先史時代における西北九州と、大陸との考古学的、人類学的な形質学的研究」をテーマとして進められた調査で、詳細は、「深堀遺跡」[25]で報じられている

3. 飯野遺跡のカメ棺

南高来郡布津町飯野遺跡は、布津扇状台地が平地に変わる、地形転換点に位置、多くの晩期黒色研磨土器Ⅱ式bの出土を伝えられている。

昭和35、6年頃、熊本県教育委員会に籍をおく上野辰男氏が、出生地の関係上調査され、カメ棺は、現在熊本市立博物館に保管されている。

カメ棺は、山の寺出土のものに類似した黒川式で、合せ口で垂直に埋土され、下カメの底部は欠失していたといわれる。

4. 礫石原遺跡のカメ棺　（第8図）

島原市三会（みえ）礫石原遺跡は、標高170～190mの、扇状地の上部に位置、戦後の開拓によって知られた遺跡である。

発見以来数次にわたって、部分的な調査をされたが、昭和36年には日本考古学協会西北九州綜合調査特別委員会の調査があり、その成果は概報で報じられている。[26]それによれば、合せ口カメ棺3基が出土、これと共在した石積み土壙墓も、小児を埋葬したものであり、礫石原でも墓域が確立、その中心をなす方形石組みも、中央立石下に小土壙を構成していた。

この周辺部において、開拓中数次にわたりカメ棺の発見があったが、（第8図）昭和36年の調査結果からして、これらカメ棺は、全部石組遺構の南側20m位のところに、集中していたものであることがわかった 。

第8図のカメ棺は、合せ口であったか不明であるが、Aカメは、カメの上半部に人頭大の石が落ちこみ、恐らく有機質の上蓋のおさえ石であったらしく、もしそうだとすれば、単カメ棺であり、開拓中の発見であるが、（表土の荒土はカットされる）他も単カメ棺の可能性が強く、発掘時の所見でも、積極的に合せ口とする資料の発見はなかった。

礫石原遺跡は、局地的には後期黒色磨研土器Ⅱ式も出土するが、主体は豊富な晩期黒色磨研土器Ⅱ式の、広大な遺跡である。

5. 山の寺遺跡のカメ棺　（第9図）

遺跡の所在する深江町は、西側を雲仙諸峯からのびる連山に包囲され、有明海に東面して開けた傾斜台地で、その9割が畑地で占め、水利に恵まれない。

台地の最上部（西端）に位置するのが、標高約240〜260mの、ほぼ30ヘクタールの面積を占拠する梶木山の寺遺跡である。

遺跡の周囲が断層した地形の変換界である関係上、（深江断層）湧水、流水に不縁で、遺跡の下側（東）端部を流れる二の川は、北側の岩床山を水源とした小流であるが、水量は僅少である。

遺跡の主体は二つで、前段では晩期黒色磨研土器Ⅱ式文化であるが、後段は、後続する文化の、刻み目の凸帯文を有する晩期黒色磨研土器Ⅲ式（山ノ寺式土器）文化である。

第9図の合せ口カメ棺は、土壙の床土をつき固め、その上に垂直に安置、下カメの底部を欠き、横にそえ石をおいて安定させ、上カメの底部は欠離して約20cm上部に残り、（この発掘調査は土堤のため横から実施）その状態から、埋葬時は上下カメ棺の両口縁部をすれすれに、合せ口にしたことがわかり、死体の下半身は下カメに、上半身を上カメで被いかぶせた形の納棺であるが、相当窮屈な納棺であったとみられ、原山支石墓石棺にも、このような事情を認めさせるものがあり、被葬体形が、縄文文化の屈葬形から完全に、解放されるにいたっていたとはみられないのでなかろうかしかしこの葬形でも、身長80cmをこす被葬体であったことは確実であろう。

埋葬地の北約70mの地点には、隅丸の方形敷石住居跡があり、住居跡内出土土器は晩期黒色磨研土器Ⅱ式（黒川式）に比定でき、カメ棺と時間的差のないことは興味深い。

6. 舟川遺跡のカメ棺

深江町舟川（ふなご）遺跡は、0mの海水の浸水遺跡で、遺跡時代後の沈降地に立地する。昭和39年、台風12号による高潮のため、護岸と盛土が流失したあとに発見されたもので、第7図1土器は、黒色火山灰質粘土層中に、垂直にすえおかれた形の、条痕調製のカメ棺（波浪のため実測不可能となり、細片となった）の内部に落ちこんでいたもので、恐らく上カメに、上下から合せ口としたものと考えられる。

土器は刷毛目を残こす黒色研磨で、首部下につまみ状のものが一つつけられている 。

7. 潮入崎遺跡のカメ棺

布津町潮入崎遺跡は、接岸する標高5mの細地で、現在吉岡要五郎氏の所有地となっているが、大正9年、私鉄島原鉄道の布設に際し、多くの遺物と共に、人骨のはいったカメ棺が出土、畑主が畑端に2次埋葬していたものを、昭和34年伊達亮秀氏が伝聞、試掘してこれを確認、後日の調査を予定していたが、昭和40年宅地造成工事で再び破壊にあう。カメ棺は単カメで、御領式であったといわれ、現在採集できる遺物も御領式で、カメ棺も御領式であったことに間違いなかろう 。

8. 原山遺跡のカメ棺

北有馬町原山遺跡は、矢代開拓地入口の、本田豊八氏所有畑地を中心とする第1遺跡、原山光明氏所有畑地を中心とする第2遺跡、楠峯片岡忠氏所有山林を中心とする第3遺跡からなり、この3遺跡を総称して原山遺跡と呼んでいる。

遺跡は、標高約200 mの台地高原上に位置、昭和26年頃、本田豊八氏の子息秀正君によって、馬

場強氏、田中幸夫氏とリレー式に伝えられ、注目されるにいたったのである。その頃、本田氏畑に所在した約50基の石棺群は、ほとんど破壊され、段々畑の石垣につみかえられていた。一方当時北串山中学に勤務中の馬場強氏（現長崎県立美術博物館勤務）によって、多くの遺物が採集され、同校に保管されたことが幸いして、遺物をとうして原山に対する注目を、さらに深めさせることができた。

上記のような経緯によって、原山遺跡が、学界に知られるようなったが、支石墓の群在だけが知られて、石棺群の存在はいつしか忘れ去られてしまっていた。

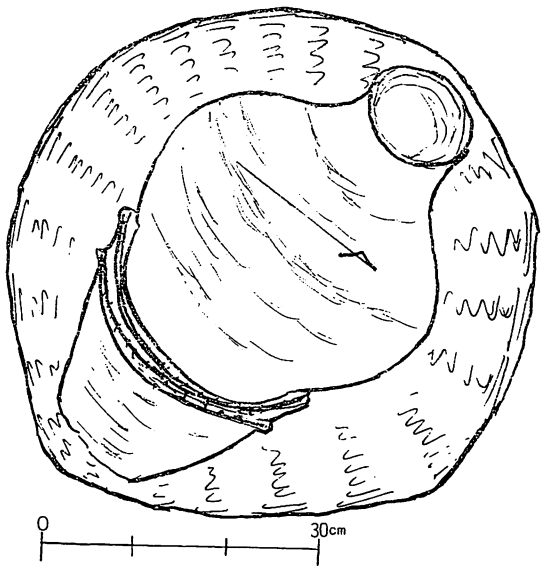
第1遺跡は50基近い石棺群と、石囲い土壙墓群、土壙墓群の中にある支石墓は、確認されたものはわずか7基で、支石墓は、墓群の中の特異な存在であった 。

破壊され消滅した今日、絶対数的にはいえないが第1遺跡の特徴は、支石墓下の構造は土壙で、土壙内には、刻み目のある凸帯文土器のカメが合せ口とし、ほぼ垂直に納められていたことで、これは破壊作業従事者の一致した話にあり、その可能性の確率が高く、松尾禎作氏の研究でも[28]、鏡山猛氏、七田忠志氏等の現地踏査の記述にふれ、暗にこの事実を述べていることでもわかる。

第2遺跡でもこのような例があったらしく、第3遺跡の、土壙内の合せ口カメ棺の横位例は、森貞次郎、岡崎敬両氏によって報じられている。昭和35年4月に実施された第3遺跡の調査で、刻み目凸帯文をもつ合せ口カメ棺が出土、「九州考古学」14の、第10図1、2カメ棺がそれで、これは垂直に土壙内に納められ、上カメの底部は欠失していた。第2遺跡は、昭和31年長崎県教育委員会が調査、（1号～4号）2次的には、昭和36年、日本考古学協会西北九州綜合調査特別委員会が調査したところであるが、第10図の合せ口土器棺は、岡光明畑において、1号支石墓東方約20mのブドー畑で発見されたものである 。

円形土壙内に、刻み目凸帯文のある、底部を欠いたカメを下に、底部を欠いた壺を重ねて、長軸の上方を西に、約45°の斜位で埋土していた異例のものであった。（第6図）

凸帯文カメと壺の合せ口棺の例は、佐賀県五反田第4号支石墓、同葉山尻第3号支石墓のそれぞれの、側で出土した2例が知られている。



第6図　原山遺跡カメ棺の出土状況図

9. 向原遺跡のカメ棺

有明町戸田向原遺跡は、海岸に近接した標高8mの底台地端に位置、谷間状地形の周辺に、若干の水田が造成されているが、遺跡は畑地である。

第10図の合せ口カメ棺は、農道開設時発見されたもので、下カメは底部を欠き、口縁に2条の刻み目凸帯を有するが、上カメは口縁

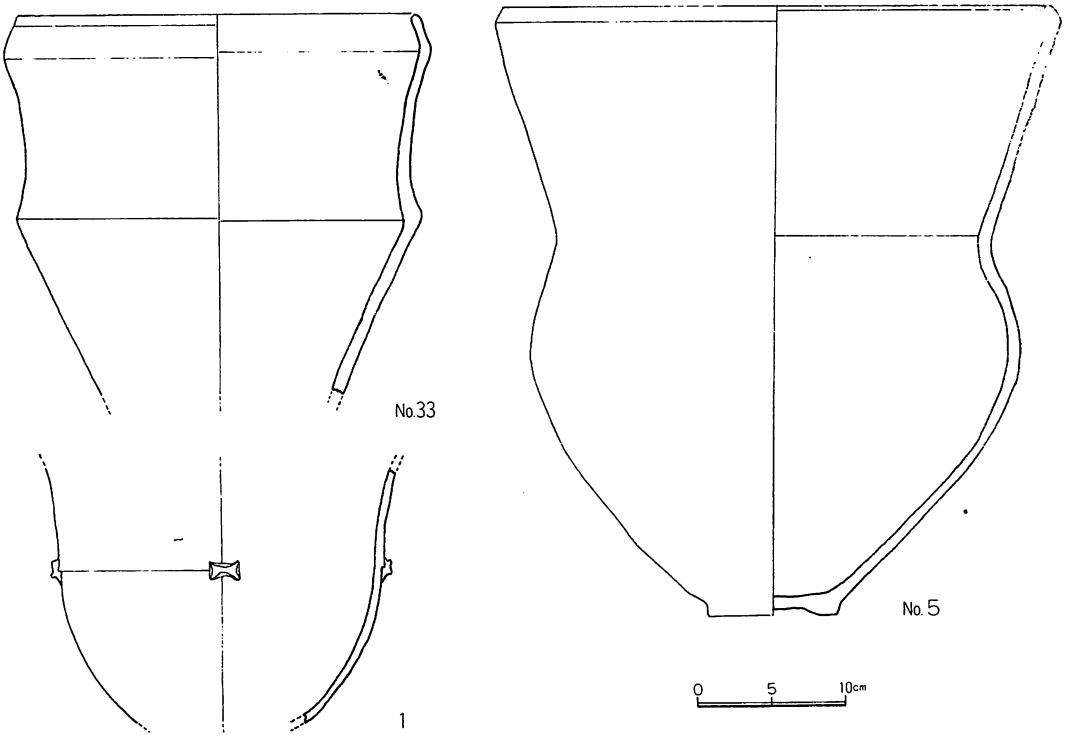
部に1条の刻み目凸帯を有し、その下の凸帯には刻み目を施こしていない。

B. 各カメ棺の土器形式

第3・7図中、No 2は筏2類、No 5は筏4類、その他は筏5類として分類でき、概様として2—3類は後期磨消縄文Ⅲ式（西平式）に、3—4類は後期黒色磨研土器Ⅱ式（三万田式）に、4—5類は同磨研土器Ⅱ式（御領式）に平行、6類後半では、晩期1式土器となる。

第9図のカメ棺は晩期Ⅱ式に属し、第10図のカメ棺は、晩期Ⅲ式に比定できるが、次の理由から、晩期Ⅲ式土器の細分を考える必要があろう。

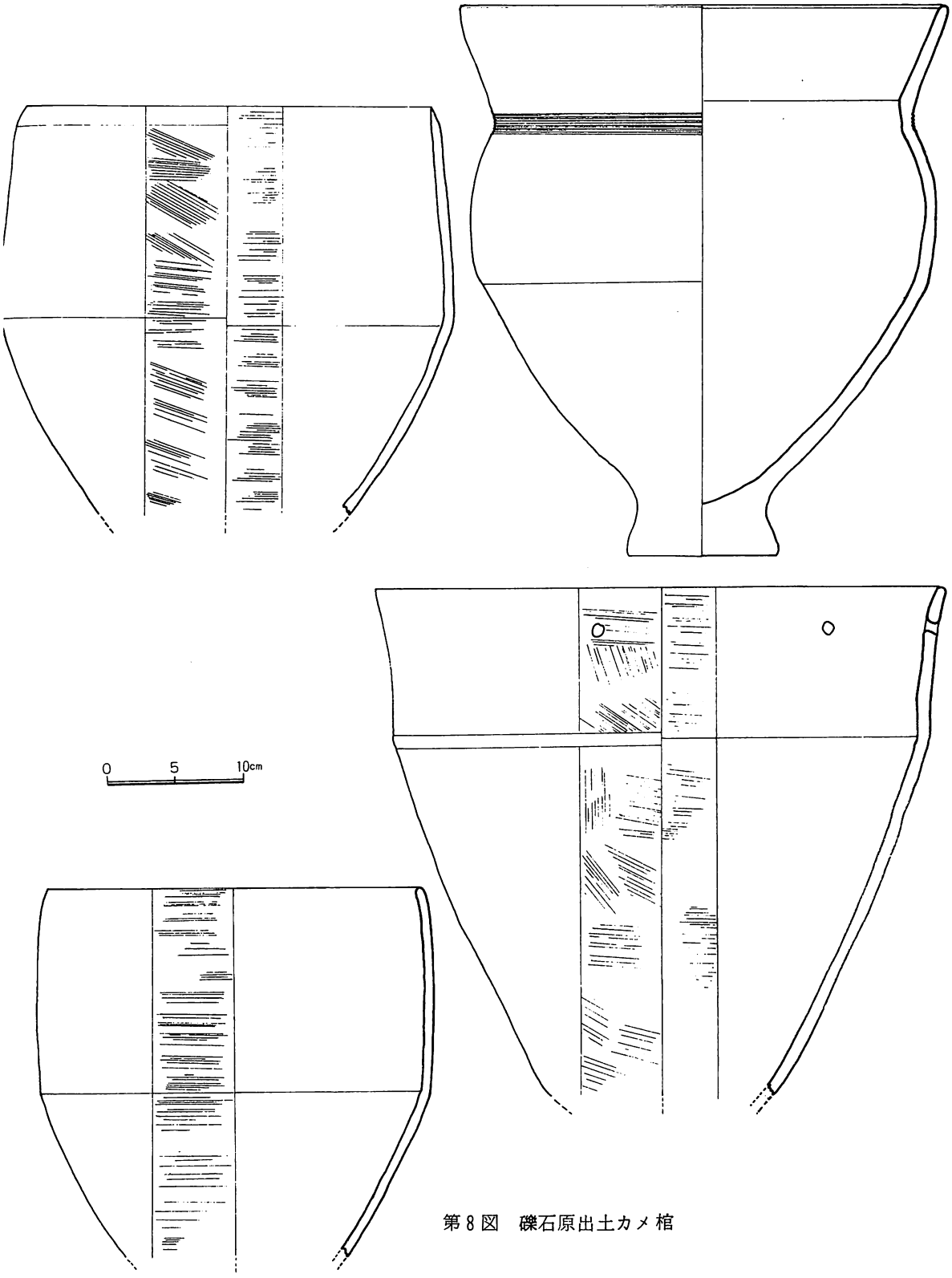
原山土器文化は台地上に位置し、板付ノ式土器を伴なうことがなく、夜臼式土器遺跡は低平地かその周縁に立地、板付1式土器を共伴するのが常で、この事実は、夜臼式土器が板付1式土器の母



第7図　筏出土カメ棺（No 33 No 5）深江町舟川出土カメ棺 (1)

体として、水稲生産を開始する原山土器文化の低平地展開とみられ、原山台地土器文化形式と、夜臼式低平地水稲化土器形は、背景社会の性格が異なるのである。刻み目のある凸帯文土器で、山の寺では全体的に丸味をもつが、原山では胴部がのび、完全なカメ形をなしてくる。

壺形土器は、山の寺では底部があげ底で、原山ではその傾向がうすれ、このような微細な変化であるが、基本的には、原山の土器形体は夜臼に継承されていく。これは親子関係の文化性故であるが、同一基盤性でなく、台地生産と、水稲農耕の差があり、土器形式細分の必要性も、そこにある



第8図　礫石原出土カメ棺

としなければならない。

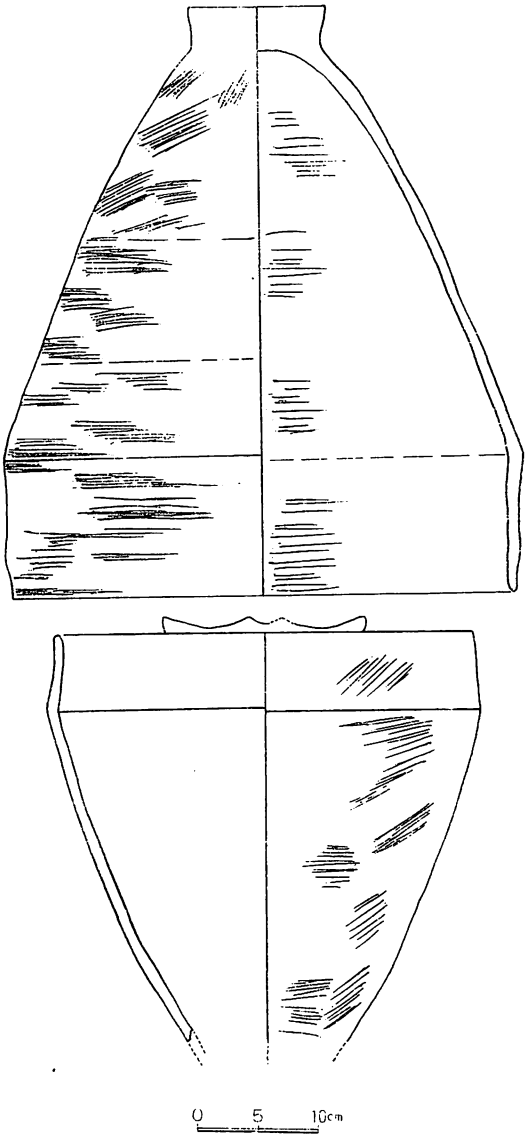
結　　び

カメ棺葬は、縄文後期末頃から急激に顕著化するが、成人死体の納棺風習はなかったらしくその例をみない。また小児カメ棺葬の風習が普遍化したことも、特定集団に限られた風習だともいいきれず、結論的には、特定の小児が、あるいはその特定の死が、特定の文化に影響を受け、「子宝」観から、納カメ葬の条件となったと考えなければならないだろう。生活の基本が食生活の安定希求であり、観念儀礼や呪術も、それと結びついたはずで、埋葬にも何かの希求があったことは当然で、カメ棺葬に対しても、その本質は、社会構造との関連において考えなければならない。

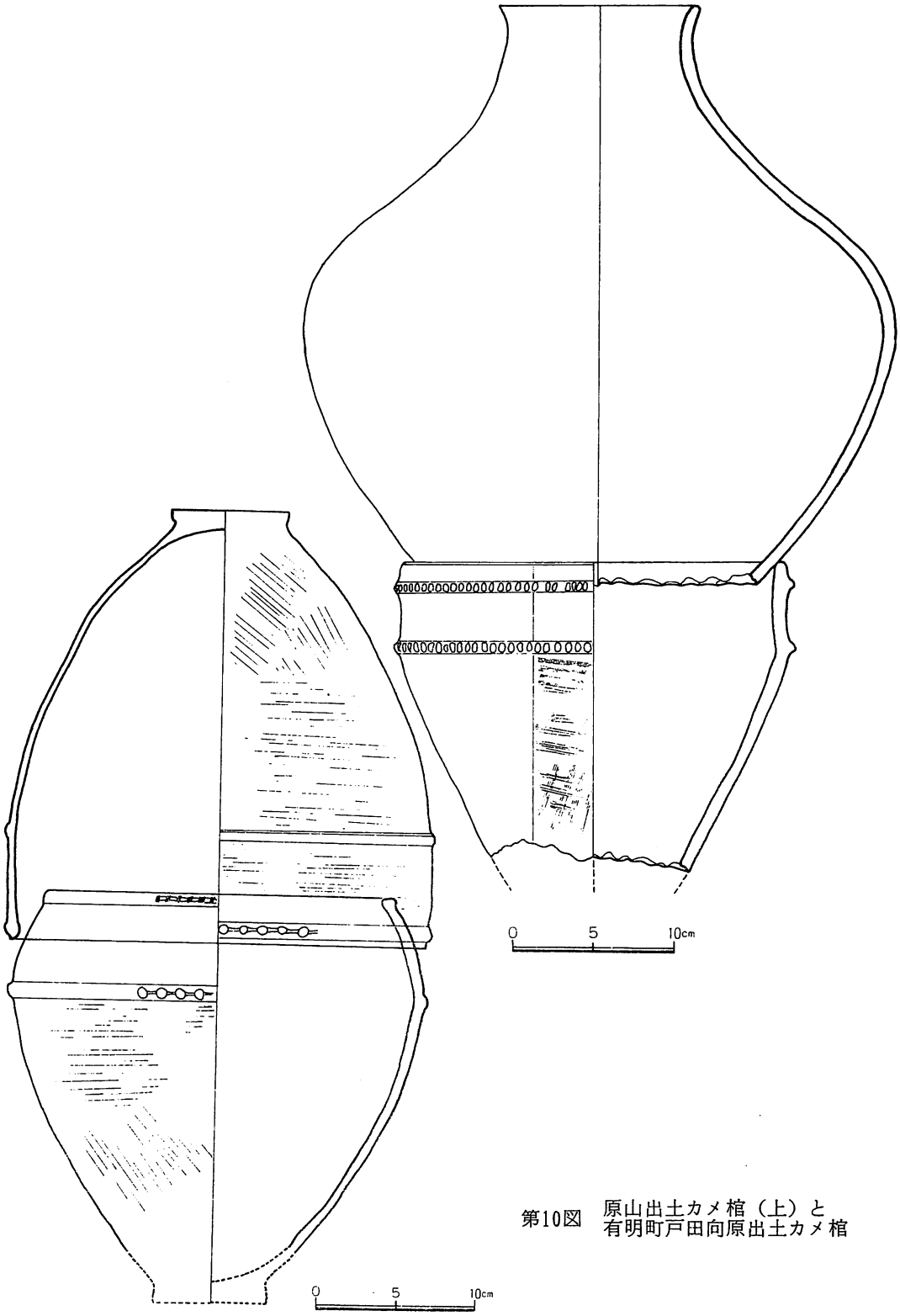
採集社会と生産社会では、埋葬の意義が異なり、縄文後期以降に拡がったカメ棺葬に対し、賀川光夫氏の意欲的な、生産社会を背景とする位置ずけは、同氏の農耕論と併せて刮目されるところであり、理由の差はあるが賛同したい。

カメ棺葬の発生をみる頃、背景文化が採集文化社会であったとしても、刺激をあたえた渡来文化は、あきらかな生産社会文化であり、現実に、日本列島のカメ棺の発見遺跡は、海岸か、河流の流域に限定される舟運との関係遺跡であり、長崎県のカメ棺遺跡も例外でない。

小稿で、長崎県の縄文カメ棺の概様をのべたが、不備と知見のせまさは後日補いたい。



第9図　山ノ寺出土カメ棺



第10図　原山出土カメ棺（上）と
有明町戸田向原出土カメ棺

1. 筏遺跡調査委員会刊(1962)「筏遺跡概報」(島原)、古田(1969)「筏遺跡発掘調査報告」長崎県立国見高等学校社研究部報(国見)、賀川光夫(1969)「縄文時代のカメ棺(1)〜(3)」考古学ジャーナル34.35.37.
2. 塩田元久、古田(1957)「島原半島に於ける縄文晩期甕棺葬の姿」島原高校社会部報プリント、(島原)前出1、賀川光夫
3. 南高来郡深江町舟川浜本吉太郎氏畑で、昭和31年9月台風12号により出土、前出 2.塩田、古田、
4. 南高来郡深江町千原、上田清治氏畑で昭和31年9月台風12号により出土、前出 2.塩田、古田
5. 南高来郡布津町潮入崎吉岡要五郎氏畑で、大正9年島原鉄道布設時出土内部に人骨残存、昭和40年の再土地整備でいまは残つていない。
6. 熊本県教育委員会上野辰雄氏が昭和37年頃調査合口カメ棺現物は熊本博物館に保存
7. 南高来郡有明町大三東(おおみさき)二つ石、前出 2、塩田、古田
8. 前出 2、塩田、古田
9. 日本考古学協会西北九州綜合調査特別委員会(1960)「島原半島(原山、山ノ寺、礫石原)及び唐津市(女山)の考古学的調査」九州考古学10.、左仝(1962)「島原半島の考古学的調査第二次概報(昭和36年度)」九州考古学14.
10. 南高来郡有明町湯江戸田向原、国見高等学校保存
11. 長崎大学医学部解剖学第二教室刊(1967)「深堀遺跡」人類学考古学研究報告第1号
12. 江坂輝弥(1968)「縄文土器文化後期における改葬棺墓の研究」北奥古代文化創刊号、葛西励(1969)「青森県下における改葬甕墓の研究」うとう 第73号、小片保、森本岩太郎、江坂輝弥(1971)「青森県表館発見の縄文文化後期初頭の甕棺と人骨」考古学ジャーナル、63.、藤沢宗平(1967)「姥山貝塚発掘の結果」考古学雑誌 第52巻 第4号、その他2.3の例がある。
13. 杉原荘介(1950)「愛知県豊橋市五貫森貝塚」考古学年報、長谷部言人(1925)「陸前大洞貝塚発掘調査」人類学雑誌40—10.、毛利総七郎、遠藤源七(1940)「陸前沼津貝塚骨器図録」、等
14. 大山伯他(1933)「東京湾に注ぐ主要渓谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の編年学的研究予報」史前学雑誌3—6、埼玉県浜貝塚(前期)では小児の遺骸があつたという。平野元三郎、滝口宍(1933)「下総高木村寒風発見の人骨」ドルメン2—7、千葉県松戸市千駄堀貝塚(中期)では、成人頭蓋骨が納められていたという。
15. 前出12. 青森県の例
16. 従長70m位の長楕円形土壙に、頭部に石枕をおき、石枕の下方に頭骸骨細片が発見された、これは明らかに小児の土壙墓であつた。
17. 渡辺誠(1967)「縄文時代における埋甕風習」考古学ジャーナル、40、「縄文時代における原始農耕の問題と埋葬観念の変質」、(1965) 富士国立公園博物館研究報告第14号、(河口湖)意欲的にとりくむ渡辺誠氏の成果は大きい。
18. 木下忠(1970)「戸口に胎盤を埋める呪術」考古学ジャーナル、42.
19. 前出11. 第54図、成人女性骨の股間に、姙児の遺骨が発見され、内藤芳篤氏の話では3〜4ケ月児ということであつた。
20. 胎盤を戸口に埋める風習は、現在島原半島にも残り、女のものは左に、男のそれは右に埋められ、多く人にふみ越えられることによつて健康に育つという風習がある。

21. 前出1.賀川光夫、(1958)「九州における縄文晩期のカメ棺」石器時代第5号
22. このカメ棺は、発掘直後国見町教育委員会の意向で国見中学校に勤務中の田島俊彦氏に復元を依頼して同校に保管していたが、田島氏が間もなく2ケ年近い入院生活をおくり、その後転勤した関係で遺物は行くえ不明となつてしまつた。
23. 前出1.国見高等学校報第4図参照
24. 前出24.第10図、第11図128.
25. 前出11.
26. 前出9.九州考古学 14.
27. 森貞次郎(1963)「長崎県南部来郡山の寺遺跡」日本考古学年報 11.
28. 松尾禎作(1957)「北九州支石墓の研究」(佐賀)
29. 前出9.九州考古学10.2号支石墓下のもの、
30. 前出9.九州考古学10.「原山遺跡支石墓の構造」表中、45がこれにあたる。
31. 前出28.
32. 前出1.1969
33. 「新版考古学講座」3.所収、賀川光夫(1969)「縄文晩期文化九州」
上記の件他、小稿関係土器分類については、賀川光夫氏がかつて発表されたものにおさめられている、前出1.11.
34. 古田(1973)「縄文晩期稲作社会のメカニズム」長崎談叢 55,(長崎)